

# 自閉スペクトラム症傾向のある大学生の 就職活動における諸意識の検討

—発達障害当事者への面接調査から—

末吉彩香

柘植雅義

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム 就労支援 大学生

## I. 問題と目的

今日、多くの自閉スペクトラム症（以下 ASD）を持つ大学生が大学に在籍しており、彼らの課題の一つとして就労に関する問題が指摘されている（例えば、梅永，2011）が、高等教育機関に在籍する発達障害学生に対する就職への支援は学修上の支援に比べて具体的な支援方法の蓄積が少なく、キャリアに関する有効な支援方法の検討が必要である（丹治・野呂，2014）と言われている。

一般的に大学生の就職活動の状況を検討する際、「進路選択に対する自己効力」や「進路成熟」が注目されることが多い（例えば、浦上，1995；坂柳，1992）。これらは学生の進路選択や就職活動の現状を知る指標の一つであるとともに、これら意識の深化や高まりによって学生の進路選択・就職活動がより有意義なものになると考えられている。しかし、ASD 学生を対象として同様の観点から調査されている研究は見受けられない。

さらにこれらキャリア・就労への意識には、学生段階でのアルバイト等の経験が影響する可能性がある。ASD 学生への就労支援において実際の仕事社会を体験させることが必要だと指摘される（例えば、北添ら，2015）一方で、学生本人がそれらの機会を自身の就労・キャリアとの関連からどのように捉えているのかについての検討は十分ではない。そのため、本人が自身の仕事社会経験をどのように捉え、結果それらの経験が本人のキャリア形成にどう作用しているかを明らかにする必要がある。

本研究は ASD 学生が大学在学時に卒業後のキャリアや就労に対しどのような意識を持ち、その意識を在学中にどう変化させるのかについて、進路選択に対する自己効力、進路成熟、アルバイト等の仕事社会経験の観点から明らかにすることを目的として行った。

## II. 方法

4 年制大学に通う 4 年生以上の発達障害学生と、4 年制大学を卒業した ASD 者合わせて 9 名を対象として半構造化面接を行い、佐藤(2008)の質的データ分析法を用いて分析を行った。面接では、進路に対する自己効力感について、進路成熟について、アルバイト・インターンシップについて質問をし、キャリア・就労について大学生時代にどのような意識を持っていたか、その意識がどのようなきっかけでどう変化したのかについて聞き取りを行った。

## III. 結果

分析の結果、493 の文書セグメントと 59 のサブカテゴリ、28 のカテゴリが生成された。

次に、生成された 28 のカテゴリについて、互いの関連を概念図にまとめた。概念図では「1 次的就職活動促進要因」「2 次的就職活動促進要因」「1 次的就職活動停滞要因」「2 次的就職活動阻害要因」を整理し、これらの要素と「大学生後半での就労に対する意識の変化」との関係性を示した。1 次的要因には就職活動の実施の有無に関わらず生じた要因、2 次的要因には就職活動中に生じた要因をそれぞれ分類した。

## IV. 考察

### 1. 就労への意識の変化

調査の中で、多くの協力者が大学 3、4 年生で就労に対する意識が変化したと語った。これは一般学生を対象とした調査結果(五十嵐，2015)と類似し、ASD 学生は一般学生と同様の時期に就職活動に関する周囲の状況の変化を感じ、就労へ意識が向き始めることが示された。

### 2. ASD 学生の就職活動を促進する要因

1 次的就職活動促進要因から、本人の自己理解や、「働く」ことへの理解の深化に仕事社会の経験が有効に働くことが示された。一方、そういった経験が本人にネガティブな影響を与えるという回答もあり、実施の際はアルバイト先の選定や活動の振り返り等の支援が必要だと考えられる。

2 次的就職活動促進要因には、就職活動中に本人の活動を促進させた要因が分類された。ASD 学生や保護者は周囲からの支援を望み、支援・相談資源の活用が就職活動中の安心感や、自信、意欲に繋がっていた。支援内容は様々だが、本人の活動に対する評価や助言や情報提供について複数挙げられた。そして周囲の協力を得ながら、結果に関わらず本人が「就職活動に参加できている・行動を起こしている」と実感することが、自信の高まりにつながることを示された。

### 3. ASD 学生の就職活動上の特徴と困難

1 次的就職活動停滞要因には、障害受容を含む心理面への支援や修学支援など、就労支援の範囲を超える支援が必要なものも含まれた。2 次的就職活動停滞要因には、実際の就職活動の中で生じた困難さが分類された。前述のように、ASD 学生も大学生後半で就労へ意識が向き始めるものの、これらの困難によって必ずしも一般学生同様に進路に関する諸側面が向上しない可能性がある。

ASD 学生への就労支援では、2 次的就職活動停滞要因に対しての支援とともに、本人の 1 次的就職活動停滞要因の状況を考慮した支援が必要であろう。

### 【文献】

- 五十嵐敦(2012)大学生のキャリア発達についての研究. 福岡大学総合教育研究センター紀要, 12, 27-34.  
北添紀子ら(2015)自閉スペクトラム症のある大学生への就労支援. LD 研究, 24(1), 111-119.  
坂柳恒夫(1992)中学生の進路成熟に関する横断的研究. 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 16, 299-30.  
佐藤郁哉(2008)質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.  
丹治敬之・野呂文行(2014)我が国の発達障害学生支援における支援方法及び支援体制に関する現状と課題. 障害科学研究, 38, 147-161.  
梅永雄二(2011)発達障害学生への就学支援と就労支援. 大学時報, 62-67.  
浦上昌則(1995)学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学教育学部紀要, 42, 115-126.

### 【付記】

本稿は、筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻提出の修士論文の一部を加筆修正したものである。

(SUEYOSHI Ayaka, TSUGE Masayoshi)